

人権ふれあいセンター情報

みんなのしあわせ

七月二十一日(火)第二回ふれあいセミナーを行いました。講師の中本さんのお話の概要をまとめてお伝えします。

差別から

解き放たれるために

「人権センターながの」をはじめ前、当時の学校同和教育を参観して思っていたのは、求めていた「教育」ではなかったということ。部落差別がどういう差別かという事だけ説明され、まるでショーウインドーの中の見本になった気分だった。

差別からの解放は、声を上げること、人と広くつながっていくこと。一人ひとりが差別と闘えるようになること。そういう教育をのぞんでいた。

人権センターながのは十七年前に、そんな願いを持った、いろいろな人が集まって設立された。

私は長野市の委託を受け、人権問題に関わる相談窓口としても活動している。様々な相談が寄せられる中、部落問題の相談は今も深刻化するものが多い。

第2回ふれあいセミナー

「相談窓口の現場から」

NPO法人 人権センターながの
中本佳代子さん

声を上げやすい雰囲気

「黙っているのが一番さね」と語る高齢者、日本では、声をあげると叩かれる。そのことが人々を黙らせている。差別に対して声を上げることとは当たり前なんだと、声を上げやすい雰囲気にしていくことが必要。

五年前の北信のある市の意識調査では若い人ほど差別意識が強いという結果がでた。部落のことを何も知らない若者が部落問題と真っ先に出会うのは差別だらけのネット情報。それを真実と置いていく。「寝た子は寝たままではない」。部落差別は部落の人の問題ではなく、部落差別があるこの社会みんなの問題。その意味で教育が大切である。

差別と闘う第一歩として

差別と闘う第一歩は、まず逃げることに、そして助けてということ、自分を好きになること

差別をなくすためには、共に働き、共に育っていくことが大事だと思っている。

コロナ禍の中、定員一杯のご参加を頂きありがとうございました。

